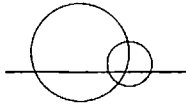


〈講演〉



3. 私が描く山田兄弟と津軽

作家 いずみ涼

【司会】 それでは第2部のほうに移りたいと思いますので、よろしく願いいたします。第2部は2つ講演を予定させていただいております。まず最初は地元の作家でありますいずみ涼さんに「私が描く山田兄弟と津軽」というタイトルで発表していただきます。今回私共が津軽、特に弘前でこの企画を持ちました時にぜひ地元の方にお1人参加していただきたい、どなたがいいだろうといういろいろ検討をしておりました。ちょうど陸奥新報社にお邪魔した時に「皇帝の森」という一大巨編の作品をいずみ涼さんが書かれており、少し前に山田兄弟のお話もその中で展開されてきた。ではぜひお願いしましょうということはいずみ涼さんをお願いすることになりました。特に地元津軽を中心に、さまざまな人達のネットワークを含めながら山田兄弟を描いていただいているというふうに解釈しておりますので、併せて楽しみにしながらお聞きしたいと思っております。ではいずみさんよろしく願いいたします。

【いずみ】 どうも、いずみでございます。よろしく願いいたします。私に与えられたテーマは「私が描く山田兄弟と津軽」です。先程来から藤田先生は東亜同文書院の調査旅行やその旅行で知り得た、当時の中国の地域の実情が詳しく報告されておりました。また馬場先生からは孫文に対する兄弟の活動が非常に詳しく報告されておりましたので、私はその事柄には触れないで、皆さんがメモ

を取らなくてもよいような気楽な話で進めて参りたいと思います。兄の良政（「さん」と敬称すべきですが、歴史的偉人は呼び捨てが普通なので、それに従います）は、もともと良吉（りょうきち）と言う名前でした。ですから「りょうせい」と名乗ったようですが、ここでは「よしまさ」と呼ばせていただくことにしたいと存じます。

さて山田兄弟は明治の区切りのよい年代に生まれておりますので、まずそれを念頭に置いていただきたい。良政は明治元年の元旦生まれ、それがキープポイントです。そして弟の純三郎は9つ下で明治9年生まれです。明治10年の西南戦争の前の年に生まれたと覚えていただければよろしいかと思えます。この激動の明治初年のこの時期に、幼少、少年だった兄弟が憧れ、感化され、そして中国へ雄飛して行く原動力となった人物が故郷に2人居りました。同じ士族屋敷で向かい同士だった陸羯南と母方の叔父菊池九郎の存在です。明治元年生まれの良政を「零歳」にすれば、菊池九郎は20歳を少し過ぎた青年士族であり、陸羯南は11歳くらい。3人は等間隔の年齢になります。それに明治9年に生まれて来る純三郎を加えても4人はほぼ10歳間隔の世代になるわけです。

良政が生まれた頃の叔父菊池九郎は、幕末から明治維新の動乱期の真っ只中を青年士族として津軽藩の命運を賭して「勤皇」か「佐幕」かで奔走していた時でした。津軽藩は、結果として佐幕派で結ばれた奥羽列藩同盟を裏切った形で勤皇派に

加担することになりましたが、その結果、明治に入ってから津軽の青年士族たちは「裏切り者」の贖罪に悩み続けたのです。その一方では、「勤皇」と言われながらも政府は薩長閥で牛耳られ、東北は“切り捨て政策”の憂き目にあうのです。これが反骨精神を生み、海外雄飛を目指す土壌をつくる要素となっていったと思われます。

ちょうど今、NHK総合テレビで大河ドラマ「篤姫」が放映され、徳川将軍家に嫁いだ島津家の篤姫の苦悩と活躍が話題になっております。篤姫が将軍家定亡き後、天璋院として動乱の幕末をどう乗り切るのか、生家の島津家を向こうに回して徳川幕府を守ろうとする姿に迫力を感じさせます。蛇足ですが、あの「篤姫」の題字を書いているのが弘前在住の女流書家・菊池錦子さん、そしてナレーターを務めているのが奈良岡朋子さんと言うことから弘前市民に親しまれているようです。

さて当時、奥羽列藩同盟を軸に、津軽藩が揺れ動いた状況を菊池九郎の動向をまじえて少し説明して置きましょう。佐幕派の奥羽列藩の中でも一番矢面に立たされたのが会津と庄内藩でした。特に会津は藩主の松平容保が京都守護職として新撰組など使い、薩摩や長州を脱藩した浪士狩りに力を入れていたことをご承知かと思えます。やがて薩摩と長州の「薩長連合」は天皇を擁して錦の御旗を押し立てて会津と庄内征伐に入るのです。明治元年3月のこと。総司令官は九条道孝と言うお公家さんです。これに対抗して庄内と会津を軸に奥羽列藩は合戦に備えることになります。

当時、津軽藩は奥羽列藩同盟の一員でしたから、出陣要請に従って庄内藩に200人程の援軍を送り込んだのです。その中に菊池九郎も居りました。しかし津軽藩内は「佐幕」か「勤皇」かで揉め続けておったのです。それは、津軽の殿さまは京都の公家近衛家と姻戚関係にあったことからです。夏の風物詩弘前ねぶたの台座には必ず牡丹の紋様が描かれておりますが、牡丹は津軽家の紋所と同時に近衛家から拝領した紋所でもあるのです。津

軽藩は、東北各藩の義理と天皇に仕える公家の筆頭近衛家との狭間で態度を決めかねていたのです。庄内に援軍を送る一方で、京都へ西館平馬と言う藩士を派遣して藩の態度を決めることにしたのです。

その間に、詳しくは5月3日（旧暦では4月でしょうか）に仙台に奥羽各藩の家老クラスの士族が集まって対策を協議しているのです。津軽藩からは山中兵部と言う家老が出席、ここで正式に「奥羽列藩同盟」が発足するわけですが、会津と庄内が錦の御旗を押し立てた薩長軍に攻め立てられている。つまり朝敵になっていることに衝撃を受けての会合だったのです。「一所懸命、徳川のために働いた結果が、何時の間にやら朝敵にされるとは、こんな理不尽な話があるか。これでは会津や庄内藩が気の毒過ぎる」と結束を申し合わせたのです。津軽藩の場合は家老の山中兵部が勝手に署名してしまったんですね。

それはそれで黙認の形になっていましたが、7月になって京都から西館平馬が帰って来て「近衛さまは、勤皇方官軍に付いて欲しいと熱望されている」と言うことから藩の姿勢は一気に「勤皇派」に傾き、奥羽列藩同盟を脱退となったのです。納得しないのが菊池九郎と後に日本基督教団のリーダーになる本多庸一の2人。帰藩命令に背いてそのまま庄内藩に潜り込んでしまうんです。津軽藩としても列藩を裏切ったと言う後ろめたさがあるものですから、あまり強いことは言えない。脱藩は死罪に相当する重罪なのですがそれを免じて2人に改名を申し付けたのです。それで菊池は喜代太郎から「九郎」に、本多は徳蔵から「庸一」にそれぞれ改名したのです。別人に仕立てようとした藩の苦肉の策だったんですね。

菊池九郎は藩主の信頼が相当厚かったようです。明治2年、藩知事となった津軽承昭公に伴われて上京、慶応義塾で福沢諭吉に学んでおります。弘前に帰ると藩校「稽古館」の充実に努めますが、藩校が廃止になると引き続き「東奥義塾」を興し

て28歳で塾長に就任します。後に親友の本多庸一も塾長を引き継いでおります。因みに「東奥義塾」の名称は福沢諭吉が付けたのとも言われております。

この幕末から明治に掛けての津軽藩内の混乱ぶりを少年時代に見て育ったのが、陸羯南（中田實）です。山田兄弟の叔父菊池九郎の男気と津軽藩の裏切りをバネに成長した羯南は、今度は羯南の標榜する「大アジア主義」によって山田兄弟を中国革命の道へ導いて行くという、不思議な縁に繋がるのです。陸羯南と山田兄弟の生家は弘前・在府町の士族屋敷の道路を挟んで向かい同士だったのです。今も茂森町通りの成豊酒店の向かいから在府町に入って、右側の三軒目辺りが陸羯南の生家中田家跡でして案内板で表示されております。そして道幅の狭い歩道を挟んだ向かい側に山田兄弟の生家跡があります。

先程も申しましたように、羯南と山田兄弟は年齢が離れて居りますので、一緒に遊んだと言う間柄ではありませんでした。良政の少年時代には羯南は上京して政論家、ジャーナリストとして活躍していたわけです。恐らく「向かいの兄さまが格好のよい論説を書いている」と憧れていたことでしょう。その頃、陸羯南は新聞「日本」を創刊してジャーナリストとしての基盤を築きつつありましたが、津軽藩が抱えたトラウマに悩まされていた頃でもあったのです。

陸羯南は家の貧しかった事情もあって、法律学校など官費支給の学校を渡り歩いて居りますが、寮生活で“賄い征伐”や教育方針で校長に楯突くなどして、ことごとく退校処分になっております。その中で原敬（後の総理大臣）と親友になっておりますが、原敬にも羯南は引け目を感じるので。原敬の出身地盛岡は、徹頭徹尾“賊軍”として行動した藩です。津軽藩のようにふらふらして居なかった。それだけに肩身の狭い思いをしたのでしょう。それが反骨精神を産む原動力になったのかも知れません。津軽藩は、近衛家の方針に

従って奥羽諸藩を裏切ってまでも「勤皇」になったわけですが、明治新政府から優遇されたわけでもなく「東北以北一山百文」の切り捨て政策に甘んじなければならなかったわけです。羯南には、明治政府を牛耳っている薩摩と長州が憎かったのです。中でも長州出身の伊藤博文のロシアとの協調外交が歯痒い思いだったのです。新聞「日本」で 厳しい論評を展開し、230日にも及ぶ発行停止処分を食らっております。

当時中国は清朝の時代で、イギリスをはじめドイツやフランスなど欧州列強に侵食されていた他、ロシアも中国や朝鮮を狙って南下政策をとっておりました。ロシアが中国を侵し朝鮮に進出することは、日本にとって喉元に刃物を突きつけられたと同じ状態になるわけです。そこで陸羯南らは「中国の保全無くして日本の安全は無い」としてアジアの結束を目指す「大アジア主義」を提唱して活動を開始するのです。その中で「中国を助けるための優秀な人材を育てようじゃないか」と言うのが東亜同文書院の設立に繋がっているわけです。

羯南と同じく主唱者だったのが公爵近衛篤磨（近衛霞山）です。弟の英磨は津軽家13代の当主になった人で、津軽とは関係の深い間柄です。篤磨公は新聞「日本」のスポンサーでもあったのです。貴族院議長の要職をこなすなど伊藤博文と対立軸にあった人物で、新聞「日本」が発行禁止処分の影響などで経営が立ち行かなくなった時には、「分かった新聞社を買ってやる」と約束した程です。ところが、篤磨公は間もなく42歳の若さで他界してしまうんです。羯南はがっかりしてしまいます。しかし論陣は褪せることなく、強硬外交を主張して日露開戦を支持する論評を展開して行くのです。

この「大アジア主義」と「東亜同文書院」は山田良政・純三郎兄弟に大きく関係して行きますが、此処では陸羯南に影響を与えた菊池九郎と山田兄弟の血縁に触れて置きたいと思います。まず九郎

の姉きせが山田兄弟の母親です。つまり父浩蔵の嫁さんです。それだったらいくらでもあり得ることですが、九郎の嫁さんのくま子は浩蔵の妹に当たる。つまり山田と菊池の両家は二重にも三重にも血縁関係にあるのです。孫文の臨終に純三郎と一緒に立ち会った菊池良一（後に代議士）は菊池九郎の子息ですから、山田兄弟には従兄弟になるわけです。

こうした血縁、ふるさと津軽の東北での立場。そして明治維新に際しての「津軽のトラウマ」に悩む菊池九郎や陸羯南の姿を見ながら山田兄弟は成長して行ったのです。そして時代に押されるように中国に渡り、孫文の革命支援に打ち込んで行ったのは自然だったのではないのでしょうか。もっとも山田良政・純三郎兄弟の生まれた明治初年、当時の日本は維新の波の中で模索を続けていた時代でした。

明治維新は、誇りの高かった武士から刀を取り上げました。「廃刀令」の実施です。しかし貫録の名目で明治5～6年頃までは扶持米代金を支給していたのです。ところが明治6年の大凶作で、この代金では米が買えなくなったのです。士族の憤懣は爆発して行きました。明治10年の西南戦争にしても西郷隆盛を頂点にした憤懣士族と政府の戦いと言ってよいものです。神風連の乱、秋月の乱など続きます。士族の憤懣は全国規模で膨らんで来る。その中で一番批判されたのは薩長閥を背景に、政府の要職にある人達です。新しい貴族の誕生です。これに反発して燃え上がったのが自由民権運動なのです。自由民権運動は不平不満の一つのはけ口から出発したのだと言ってもよいでしょう。もちろん菊池九郎も陸羯南も大賛成で、いろいろ奔走しております。明治憲法が發布された明治22年2月11日と日を同じくして陸羯南は新聞「日本」を発刊して居りますが、意気込みの現れと言ったところでしょう。

自由民権運動はうまく行き過ぎたきらいがあります。そうになると不平士族のはけ口が無くなって

来たんです。そこで次に国外に眼が向き出した。「大アジア主義」はそんな雰囲気の中で注目されたのです。陸羯南は「大アジア主義」を「国民主義」とも言っている。つまり西洋に学んでも良いが、西洋かぶれになってはいけないと戒めている。国民主義の基本は「日本人の魂を忘れてはならない」、それを踏まえて「中国の力になる」ことなのです。

羯南に憧れていた山田兄弟の兄良政は、父浩蔵に「中国に行きたい」と相談する。浩蔵も出来た人で、浩蔵と羯南は友だちだったので出掛けて相談する。すると羯南は「これから中国とは海産物貿易が大切なポイントとなる」とアドバイスを受けて、良政は中国へ渡る手段として水産学校へ進学するのです。卒業後は北海道の昆布会社に入社して念願通り中国駐在になり、日清戦争が始まると通訳として台湾に渡り総督の児玉源太郎や民政局長官後藤新平と知り合い、孫文との出会いに繋がって行くことになります。

良政が戊戌の変で梁啓超を匿い、軍艦「大島」で日本に亡命させたのは明治32年のことで、惠州で行方不明になる前年のことです。これは公使館から頼まれて神田三崎町に住ませたのですが、そこに9歳下の純三郎が兄貴の後を追って津軽出て来るのです。純三郎はそこで兄を訪ねて来た孫文を初めて見かけるのです。こんな風に回顧しております。「兄のところには、壮士風の者が大勢出入りし、議論をする、座敷で相撲をとると言う有り様。それでいて兄は話らしい話をして呉れないので、何をして暮らしているのか、さっぱり分からない。ある日のこと、兄は壮士たちに「きょうは清国からエラモノ（偉い人）が見えるから、相撲などやらずおとなしくして居れ」と言うのを聞いた。これまで清国人の写真を見ると、のっぺりした顔や少々口を開けているようなものが多かったので、エラモノは一体どんな顔をしているのか好奇心に駆られた。障子に唾で穴をあけて盗み見したところ、容姿端麗、それまで考えて

いた人物とは違っていた。口許が締まっている。ただおでこと同じ程度に後頭部が出ている。大きな頭だと言う印象だった」。それが孫文だったのです。

一方清国政府は、日清戦争で日本に負けたけれど日本の明治維新の素晴らしさを学ぶ必要があると考えていたのです。そこで国費で日本留学生を送り込み始めました。日本に追いつき追い越せと士官学校にも人材になるべき若者を送り込みました。明治の終わり頃には、留学生は3万人に達していました。ところが皮肉なことに、留学生の中でも優秀な学生や士官学校生ほど革命思想に目覚めて、孫文を支援するようになるのです。清国政府にしてみると、国費を使って革命分子を育てているようなことになるのです。もっとも西欧列強の侵略から脱出しようと清国には3つの近代化の流れがありました。1つ目は先程、馬場先生がおっしゃって居られた「変法派」。康有為と梁啓超が若康き光緒帝と諮って専制国家から日本に見習って立憲君主国にしようと言うもの。ところがいざ実行の段になって袁世凱の裏切りと、西太后のクーデターによって光緒帝は幽閉され、康有為と梁啓超には刺客が放されるのです。梁啓超が山田良政に匿われて日本に亡命したのは、そのようなことから、戊戌の変と呼ばれております。2つ目は「洋務派」です。李鴻章と直隸総督の曾國藩は、西洋からの技術文化を採り入れて、軍需工場を作るなど国力増強に努めようとしたことです。洋務派の基本は政治制度と精神文明は中国のものとしていたのです。そして3つ目が孫文の「改革派」。改革派の主張は「滅清興漢」です。清を滅ぼして漢を興すと言うことを旗印にしているのです。清は満州族が漢民族の明を滅ぼして造った国で、あの弁髪は満州族の表徴なんです。300万足らずの満州族に4億の漢民族が征服されていることと、腐敗政治に孫文は共和制を唱えて、「もとの漢民族の国に戻そう」と立ち上がったのです。

ところで、漢民族の多くは北京から2000キロ

も離れた福建省とか広東省など太平洋沿岸に住んでいました。孫文もその一人です。そんなこともあってか戦略の違いがあり、宋教仁らと意見の衝突があったようです。広東など遠隔地から攻めて北京制覇を目指そうとする孫文に対して、宋教仁は長江中流から一気に北京を攻め落とそうと進言するのです。事実、孫文程戦下手な人は居なかったと言われるように、10回蜂起して10回とも失敗しているのです。その中には山田良政が犠牲になった惠州蜂起も含まれているのです。

当初、良政は梁啓超の変法派に関心を寄せていた節がありますが、孫文の私利私欲の無い純粋さに惹かれるようになったようです。孫文の熱烈な支持者の宮崎滔天も手記『三十三年の夢』で、孫文の魅力に触れて居りますが革命資金を集める手腕も、孫文の山師でない純粋さに出資者が打たれたからのことでしょう。

惠州蜂起を前にして孫文と山田良政が台湾に渡り、総督の児玉源太郎と民政局長官の後藤新平に武器援助を申し入れております。当初は師団派遣を含めて非常に可能性が高かったのですが、明治33年に孫文を支持していた山県有朋から政権が伊藤博文内閣に代わるんです。伊藤は清朝支持を打ち出して方針ががらりと変わってしまい、台湾での約束は反古になってしまいます。仲介の労をとった山田良政は責任を感じて惠州に赴き、そして遭難するわけです。

これには後日談があるのです。後藤新平が少年時代に山田兄弟の叔父菊池九郎に助けられた話です。後藤は山田兄弟がその恩人の甥と知って、良政に武器支援出来なかったことを悔やむのです。そして後藤は満鉄初代総裁になってから、良政の遺志を継いだ弟純三郎に孫文支援のある秘策を与えるのです。

話は明治7年、後藤新平がまだ16歳の少年の頃に遡ります。山田兄弟の叔父菊池九郎は28歳、東興義塾塾長でした。ウォルフと言う英語の外人教師がアメリカへ帰国することになり、奥州街道



を東京まで見送りの旅を続けていたのです。水沢辺りで薄汚れた服装で無銭に等しい旅の少年と遇ったのです。聞けば父親と喧嘩して家出同然の道中らしい。福島に前に水沢で参事を務めた安場保和と言う人物が今は福島県令（県知事）になって居る。少年は水沢時代に安場の書生だったので、その縁で須賀川の医学校入学を目指しているとのこと。菊池九郎は、須賀川まで同道するように説得して同宿させ、夜はウォルフに英会話を習わせたのでした。その少年が後藤新平だったので。

後藤はその後、須賀川医学校を無事卒業して安場の愛知県令転出に従って愛知県医学校（現在の名古屋大学医学部）の医師になり、24歳で同校長兼病院長を務めるようになったのです。自由民権運動で板垣退助が岐阜で遊説中に暴漢に襲われた時、「板垣死すとも自由は死せず」と言ったのは有名な話ですが、現場で傷の手当てをしたのが後藤新平だったので。後藤は医者としても優秀でしたが、公衆衛生の知識と手腕は見事だったようです。特に疫痢とコレラが大変流行った時代でした。その手腕を台湾総督の児玉源太郎に買われて民政局長官として招聘され、それから政治家の道へ入って行くわけです。後藤は台湾の民政局長官の後、児玉の推薦で満鉄の初代総裁に就任しますが、この時山田純三郎を囑託として満鉄の石炭部門の担当者にするのです。これは孫文支援のための手段だったので。台湾時代、惠州蜂起に支援出来ずに、あたら山田良政を死地に追い立てる結果になった、その贖罪を弟の純三郎を通じて償おうとしたのではないかと思われまます。人と人の結びつきの強さ、そして不思議さが世の中にはまだまだありそうです。

ちょっと時間オーバーになりましたが、これで終わらせていただきます。

【司会】 どうもありがとうございました。では少しだけ間を入れまして、本学の前教授でありました北嶋先生、ご当地出身です。一言。

【北嶋】 ちょっと横から入りまして。陸羯南と良政との関係について、いかに羯南が良政を心配していたかということを一言だけお話させていただきます。陸羯南（中田實）と山田家との関係、つまり山田家と中田家は向かい合わせだったということは先ほどお話がありましたけれども、山田良政が惠州の蜂起で行方不明になります。みんな彼が死んだものと思い、確かにその時戦死しているわけです。良政は明治33年に戦死しておりますが、羯南が34年に弘前市の友人笹森儀助宛に「良政（浩蔵伴）はまずはこの世の人と存じ候由、報知これあり。四川か西安に参り候かと申し候。お序に浩蔵氏へ御伝声願ひ度候」というふうの手紙を書いています。つまり良政は、神田三崎町にいた時から羯南のところへ行っているいろいろ教えられ、あるいは影響を受けているわけで、先ほどお話のあった戊戌の政変で日本に亡命した梁啓超らと一緒に王照を亡命させますが、この王照の保護を良政達は羯南に要請しています。羯南がこの人を根岸の一屋に保護しています。このように羯南は良政と非常に親しい関係を持ちながら彼に影響を与えていました。つまり良政のアジア主義というのは、陸羯南のアジア主義の影響があるのではないかというふうに考えることができるということです。まあ羯南については先ほどおっしゃったように昨年当地でシンポジウムが開かれておりますけれども、近衛篤磨が東亜同文会を設立した時に幹事になっております。つまり東亜同文会と羯南もまた深い関わりがあるということです。そして良政が東亜同文会の南京同文書院の教授として1900年に行きます。弟の純三郎も学生として行く。しかし義和団で同文書院は上海に移ります。良政は惠州蜂起のことを聞いてそれに参加して戦死してしまう。そういう状況がありました。

もう1人南京同文書院の教え子で櫛引武四郎という人がいます。この人も羯南、良政と同じ東興義塾の出身で惠州の戦いに参加しておりますが、その危険な重囲の中を無事逃れて上海に帰りま

す。しかし辛亥革命のあとの第二革命で再び戦争に参加して戦死しております。こういったように弘前出身の人が中国革命に影響を与えていた、協力していたということが分かるということを一言付け加えさせていただきます。

【司会】 ありがとうございました。北島先生は本学で西洋史のご担当でありましたが、弘前ご出身で弘前をこよなく愛されていて、今度の会でもずいぶんいろいろ教えをいただきました。どうもありがとうございました。